

「知ること」「語ること」の大切さ。

支え合い、助け合う社会を目指してー



国際アルツハイマー病協会と世界保健機構は、2012年に毎年9月を「世界アルツハイマー月間」と制定し、認知症への理解を呼びかけています。今年の啓発標語は、「もっと知ろう もっと語ろう 認知症」です。

問 高齢者支援係（内線 1175）

皆さんは「大恋愛ー僕を忘れる君と」をご存知でしょうか？

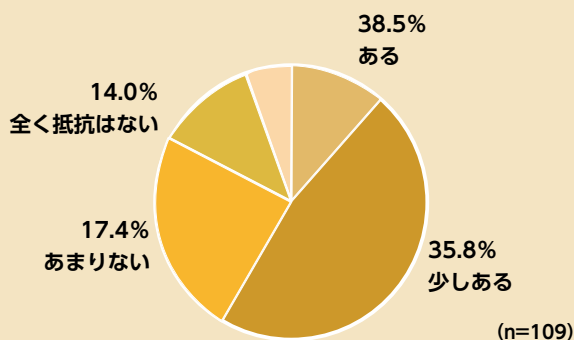
2018年にTBS系「金曜ドラマ」で放送されたテレビドラマで、若年性アルツハイマーの前段階とされる軽度認知障害（MCI）に侵された医師の北澤尚（戸田恵梨香さん）と、元小説家の間宮真司（ムロツヨシさん）の恋愛物語です。すべてを「忘れてしまう」不安や恐怖を抱えつつも、今という瞬間を懸命に生きる尚や、献身的に支える真司の姿に胸を打たれた方が多く、大きな感動を呼びました。

しかし、仲睦まじい恋愛シーンの一方で、二人が積み上げてきた信頼関係を瞬間で壊す病氣進行の早さー、ドラマ自体が恋愛、結婚、出産を含む10年間の物語であることから、「いつか自分を忘れてしまう」相手を長期的に支える困難さーなども描かれ、ドラマだけの世界ではなく、現実として考えさせられる内容であることは間違いありません。

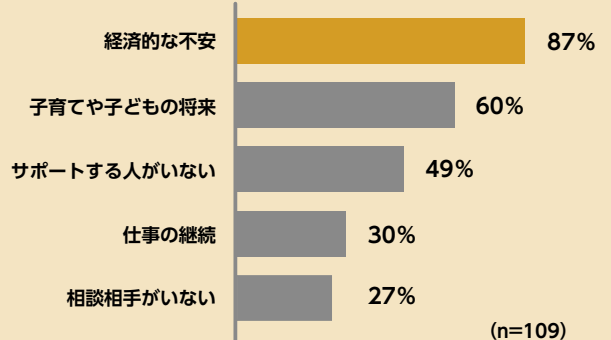
保険会社が子育て世代を対象に、インターネット上で実施した調査では、パートナーが認知症になった場合、現在の生活への影響だけでなく、子どもの将来にも不安が及ぶという結果が出ています。（右下）また、認知症を身近に感じたことがありますか？との質問に対しては、祖父母のを中心に、7割以上が「ある」と回答しています。

（下）
認知症を発症しても、日常生活で誰

認知症を身近に感じたことはありますか。



パートナーが認知症になったとき、不安に思うことを教えてください。（複数回答）



オレンジフェスタ in リブリオ行橋

9月22日(金) 10:00~15:00

認知症について、子どもから高齢者まで幅広い世代のより多くの方に知ってもらうために、普及啓発イベントを開催します。VRIによる認知症体験など、どなたでも楽しめる企画を用意しています。

また、当日はリブリオとの共同企画として、映画の上映(先着順100名)や認知症の特設コーナーを設置しています。ぜひ、お気軽にお越しください。



「わすれてしまう病氣」になってしまった大好きなおばあちゃんを、小学生の「ぼく」の視点から描いた『ぼあばは、だいじょうぶ』(楠 章子・作 いしいとむ・絵)。10万部をこえるベストセラーとなっているこの作品の実写版を上映します。



認知症関連の本がズラリと並んだ特設コーナー。子どもから大人まで、あらゆる世代に対応した選書をしています。

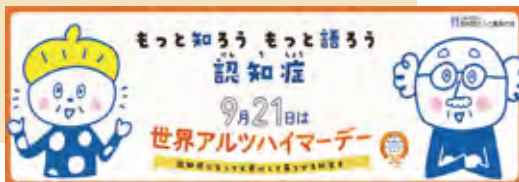
おすすめの図書



39歳で認知症と診断され、「人生、もう終わり」。そう思っていたが…。実在する夫婦の9年間の軌跡。2023年6月に映画化され、全国の劇場で公開。『オレンジ・ランプ』(山国秀幸・著 幻冬舎文庫・出版)



ある日、じいちゃんと入れ替わった「ぼく」。お世話をするのが嫌だった認知症のじいちゃんの世界を体験した「ぼく」と家族の物語。『じいちゃん、出発進行!』(藤川幸之助・著 天野勢津子・イラスト)



目頃から押さえておきたい3つのこと



総合的な相談窓口

高齢者相談支援センターでは、介護サービスの使い方や高齢者に関わる様々な相談を受け付けています。ご自身やご家族、近所の方々の相談や心配ごとなども気軽に相談できる総合的な窓口です。お住まいの地域で担当がありますので、詳細はP15をご確認ください。



サードプレイス

地域の人たちが気軽に集い、介護についての悩みを共有しながら、専門職の方にも質問ができる場所「認知症カフェ」が市内5箇所にあります。ご本人のお出かけ場所としてはもちろん、ご家族が同じ境遇の仲間と楽しく過ごす場所としても最適です。



予防とトレーニング

計算ドリルなどの脳トレは予防に一定の効果がありますが、一人で黙々とやっても十分な効果が見込めません。脳の活性化には、人とのコミュニケーションをとり、楽しく取り組むことが重要です。例えば、「健康楽習室(8月号P13)」では、この効果を最大化する方法を取り入れています。

かの助けが必要になったとしても、できる限り住み慣れた場所で暮らしていくことは、誰もが当たり前に望むことだと思います。そのためには、家族はもちろんのこと、地域で助け合える声をかけ合える関係性であることが大切です。

市では「みんなで支えあう行橋市福祉のまちづくり条例」を定め、誰もが住み慣れた地域で支え合いながら暮らすことのできる社会を目指しています。

また、認知症のことを正しく理解し、寄り添う気持ちを持って認知症の方やその家族に関わってくださるサポーター(認知症サポーター)を増やす取り組みも行っています。(P15「やさしい認

知症講座)
幼い時にお世話になった身近な人が認知症になった時、何ができるか考えてみませんか。まずは、認知症という病気を正しく理解することで、自分事や身近なこととして受け止めてもらえるのではないかと考えます。

ドラマの中で真司が尚のことについて執筆した小説には、このようなタイトルがつけられていました。
「もう一度 第章から」